

骨折をしてわかったこと

小谷

私の人生の転機、それは今思うと『骨折』の体験です。

私の学生時代までの生活は平和そのものでした。将来に何の不安もなく、大きな病気もしたことがない本当に平和な日常でした。

ある日、私はいつものように平和ぼけをしながら何も考えず歩いていました。しかしその時悪夢が起きたのです。何気なく坂を下っているとアスファルトに小さな溝があり、なんと足をひねって転んでしまいました。・・・一瞬息がとまりました。何が起きたかわからないまま動けずにいると、近くを通った人が救急車をよんでくれたので病院にいき足を固定してもらいました。

それから松葉杖生活の始まりです。どこかに行きたくても、何かを食べたくても、うまく動けません。気分が乗らないのでご飯も美味しく感じませんでした。何でも補助が必要で、外に出ている人がうらやましい毎日でした。

しかし色々な発見がありました。電車やバスに乗ることがこんなに大変だったのだということ。それまでは何も気にせず普通に歩いていたところがやたら坂になっていたり、でこぼこしていたり滑りやすくなっているということ。優先席がいつも埋まってしまうことや、駅などのエレベーターがいつも健常者でいっぱい乗れないことなどなど・・・

この体験をしてから、ちょっとしたことで歩けること、走れること、自転車に乗れることが本当に幸せだと思えました。健康は何にも代えがたいものだということをいつも意識するようになってから、全てのことがポジティブに考えられるようになりました。今思うと骨折の体験は、私にとって考え方が変わったきっかけ、まさに転機だと思います。

とはいってもこれから先まだまだたくさんの『転機』があると思います。その時はわからなくても、日々の出来事も、もしかしたらこの執筆も、「もしかしたらあのときの体験が人生の転機だった」なんて思うかもしれません。何がきっかけになるかわからないので今日から色々なことを転機として考えてみようと思います。

ゆとりある老後

いごっそう

転職は、いろいろな場面において従来の環境から異なる環境に変わるきっかけになった。

変わったことといえば、職場が都内になったり、朝夕の通勤電車の中で座れなくなったり、と些細なことを挙げればキリがない。その中で、最も変わったことといえば、給与明細への関心を深めるようになったことである。

新卒で社会人となり給与をもらうようになったころ、手取り額といわゆる年収額との間にかなりの開きがあることに疑問を持ったことがある。それが、税金や健康保険料などが天引きされているためだということに気がつきはしたものの、ではいったいくらい引かれているかには、当時ほとんど関心を払わなかった。給与明細をちらとみて、「ああ、高い、、、」と思いはするが、すぐに忘れる、そんな調子である。

そして、転職をした。最初に頂いた給与明細をみて、見かけ上の手取り額が大幅に増えたことに驚いた。それもそのはず、天引きされていたものがされていないためである。そして、数ヶ月経って、税金諸々の請求書が郵送で届いた。請求金額をみて、初めてその大きさを実感することができたのである。

このようにして、転職は給与明細への関心を深め、税金などをまじめに考えるになるきっかけとなった。さらには、ゆとりある老後を送れるように資産形成も考えていこうかな、と思うようになるきっかけもなった。



【 転 機 】

the Turning Point

我が転機到来か？

ぼんちゃん

先日人間ドックの結果が出た。成人病関連数値に厳しい数値が並んで、報告書にはメタボ寸前と記載されていた。予想はしていたが、現実となった。これまでも、警戒警報下で、野菜中心で規則正しく三食を取り、飲酒を制限し、適度な運動をと指摘されて、少しは遵守していたつもりではあった。一層の改善が求められていることは自覚している。現時点で身体や健康を考慮したとき、年齢的にもターニングポイントで、意識的にもこれまでとは同じであってはならない年齢である。

15年前から山里歩きを継続して、昨年も約50回歩いた。低山や丘陵等中心である。先輩に“高い山はなかったね”と言われた。確かにアルプス級はなかったが、春は沼津鷲頭山、夏は朝日岳山麓大鳥池、秋は岩櫃山と自分としてはそれなりの山に挑戦したのだが、山男にはいずれも高尾山にしか見えないのだろう。山歩きと称するには2000m以上の山々言うのが一般で、北は岩木山や八甲田山、早池峰から南の石鎚山、阿蘇山等も目指したい。しかし、体力的にはここ数年内だろう。趣味の世界でも、分岐点を迎えつつある。

現在の業務にも触れなければならない。我が業界では、一昔前だが、“50歳、60歳漢垂れ小僧”と言われていたようである。実務経験が優先と言うことであつたらう。現在では、状況はガラリと変わり、国際化はもとより、法改正が毎年行われ、大量の知財情報がインターネットで飛び交い、付いて行くだけでも大変である。プロパテントに立ち向かい、クライアントに応えるにはそれだけでは足りないことは疑いない。そろそろこの点でも岐路に立っているのかもしれない。



答えは腹の中にあり

松尾

大きな転機となった出来事はいくつかあるが、語りつくせないのでもここ十年で一番の転機を振り返ってみたい。私は1999年にオリンパスに入社し、内視鏡開発部に配属された。自分たちが医療機器を使うことはないし、医学知識も中途半端なので、自分らしいアイデアを出すのはなかなか難しかった。配属後3年が経過しても状況は変わらず、このまま何もなさずに埋もれてしまうのかと思いはじめていた。

そんな時、ちょっとした体調不良で大腸内視鏡検査を受けることになった。特に病気は見つからなかったが、別の問題があった。私の大腸は内視鏡に不向きな複雑な形状をしていたのである。おかげで検査は相当に痛かった。ところが、痛いわりに頭は冷静に働いていて、腹の中で内視鏡がどういう動きをしているのか、どこが引っ張られて痛いのか、といったことを深く理解できた。これが大きな転機であつた。

痛みの生じるメカニズムさえ理解すれば、あとは機械工学のテリトリーで解決できる。複雑な大腸の持ち主として、患者が楽な大腸内視鏡を開発しようと心に決めた。その後、試作と実験に2年間没頭し、具体的に何をすべきかを見出した。コンセプトと試作機をベテランのドクターに紹介し、多くのドクターが目を輝かせてくれた。しかし商品にするにはまだまだブラッシュアップが必要であつた。ここからドクターとの共同作業が始まった。改良とディスカッションの繰り返しに6年を要した。そしてついに商品の仕様が固まり、私は退職して知財業界に入った。

先日、「痛くない大腸内視鏡」の第一弾が発売された。痛み軽減効果は相当なものであることが実証され、学会でも多くの発表がなされた。リリース直前に退職したため、最高の舞台には立ち会えなかったものの大いに満足であつた。そして今、弁理士として新たな道を歩み始めた。いつかまた、今のことを良い転機であつたと振り返れるようにしたい。